氏名	船木　麻代
ヨミガナ	フナキ　マヨ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第278号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉　山田流箏曲における即興技巧「洒落弾き」についての研究 〈演奏〉　千箱の玉章(山田検校作曲) 新ざらし(北沢匂当原作)

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	萩岡　松韻
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	小島　直文
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	盧　慶順
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	塚原　康子
（副査）	東京藝術大学	非常勤講師		野川　美穂子

（論文内容の要旨）

「洒落弾き」とは、山田流箏曲の演奏における即興技巧であり、山田流箏曲にとって独自の特長と位置付けられるものであるが、その性質について目に見える形で詳細を語られた文献等はほとんど見当たらない。今後、洒落弾きに興味を持つ人にとって、研究の参考資料の一つとなることを期待し、洒落弾きの性質について整理し、まとめることを本論の目的とする。

洒落弾きは、タテと呼ばれる演奏内における箏奏者のリーダーが、本手（原旋律）に対して即興的に装飾を加えるものである。山田流箏曲においてタテとは、オーケストラでいう指揮者の役割を果たすポジションにあたり、演奏上のすべての決定権を持つ。オーケストラの指揮者と比べて見た場合に最も異なる部分といえるのは、指揮をとりながら自らも演奏しているという点で、演奏面だけでなく、統率面においても優れた演奏者が担うポジションといえる。

そもそも、タテ・ワキといった演奏内における序列概念は封建制度に始まり、それが伝統芸能の分野にまで影響を及ぼしたとされている。タテは、演奏内において絶対的な決定権を持ち、ワキ以下の演奏者は忠実にそれに従うというスタイルは、封建制度の構図そのものをあらわしているといえる。そして、その序列概念があったからこそ、指揮者を個別に立てることなく合奏を円滑に進行する合奏スタイルが出来上がった。

しかし、楽曲内には随所に細かい緩急が存在し、それを何の合図もなしに演奏者全員で揃えるのは至難の技といえる。検校は盲人演奏家であったため、現在のように体でアクションをとって息を合わせるといった「視覚的」な合図は、当然ながら発想にもなかったであろう。そこで編み出された方法が、洒落弾きやかけ声といった「聴覚的」な方法であった。特に、洒落弾きについては「楽器の音」という演奏上において最も自然な方法といえるものであり、進行指示や合図の役割を果たすと同時に旋律の装飾にもなるという一石二鳥の効果を得た最適な手段であるといえる。

今でこそ拓かれた存在となった洒落弾きであるが、昔は非常に特別なものであったとされ、その起源は検校制度にさかのぼる。制度が存在していた当時は、検校のみが扱うものとなっていたが、制度が廃止されたことをきっかけにその制限が緩んできたと見られる。しばらくの間は家元（＝男性）格の演奏者にしか弾いてはならないという風習が根強く残っていたが、それも徐々に緩和され、現代においては、男女の隔たりだけでなく、老若の面においても制限が無くなり、ほぼすべての人に洒落弾きが弾けるような時代となった。筆者がこれをテーマとし研究ができるのも、こうして拓けた時代になったおかげであるが、それをありがたいと感じる一方で、洒落弾きの特別感や価値が薄れてきているのではと懸念する一面もある。拓けた存在と

なったために、筆者たちのような若年世代にとってはそれを弾くことが当たり前となってしまっているような部分は否定できず、その意識を問われる時代を迎えていることが研究の課程で浮き彫りとなった。

洒落弾きが、本来筆者たちのような年代で弾かせてもらえるような簡単なものではなかったという事実は、今となっては遠い昔の事となり、自ら進んで興味を持たなければ、日常の中で知り得ることはほぼ無いに等しいといえる。そのような中で埋もれていった事例がどれほどあるであろうか。口頭伝承が基本となっているこの分野において、目に見える形を残すという作業は、そういった意味において非常に重要であると筆者は考えている。検校時代から現代までの間で、洒落弾きの地位がこれほど変化してきたように、今の洒落弾きの価値も、数十年後・数百年後には更に変わってしまっている可能性も決して否定はできない。そう考えた時、今知り得ること、現在における洒落弾きの価値をここに記録しておくことが、後になって意味を見出すものとなることを期待している。

洒落弾きは、筆者たちのような若年世代にも弾かせてもらえる時代になったとはいえ、決してこれを安易に扱うべきではない。何より大切なことは、それを弾かせてもらえる筆者たち自身が、常にその意識を忘れることなく洒落弾きに向かうことであり、それこそが、時代とともに変わりゆく洒落弾きの「価値」を守ることに繋がると結論付けた。

（総合審査結果の要旨）

この論文は、山田流箏曲独特の主旋律に対して即興的に演奏する、いわゆる「洒落弾き」についての研究で、洒落弾きを施すことによってその曲を更に華やかにしたり、コンダクターの代わりをしたりと、主になる演奏家の力量を問われる奏法で、特に今回の研究は、その前者の曲を華やかにする奏法の研究論文である。

三年間の集大成にあたる今回は、その中でも秘曲とされる「新ざらし」で原曲となる「さらし」に即興的に洒落弾きを弾き又、独奏を入れる大変困難な曲で、論文とされるのも始めての事と思われる。昔は、限られた者しか演奏をする事ができない『秘曲』と言われた曲で、大学での研究は大変画期的な事と思われる。今後の若い演奏家に対しても、貴重且つ意義深い研究である事を認める。又、演奏も大変レベルの高いものであった。

以上の事から、優れた成果と認め合格とした。